



身近にある大切なもの

通勤途中の道路にツツジがきれいに咲き始めた。気候も良いので窓を開けて海沿いを走ると潮の香りも漂い、何だかやる気が湧いてくる。仕事の締め切りに迫られていても何とかこなせるのは、このような良い環境の下で働いているからかもしれない。そんな僕も、仕事に行きた

くないと思った時期が最近あった。

実は3月の中ごろ、新型コロナウイルス陽性と診断された。幸いにも症状は入院するほどではなかったが、3日にわたり高熱にうなされる経験をした。ありがたいことに体力は徐々に回復したのだが、それに反比例するように得も言われぬ不安が次々と湧き出てくる。人にうつしてしまわないだろうか、後遺症はあるのだろうか、このまま社会復帰していいのだろうか。

担当してくれた保健所の方の助言に救われながらも隔離期間が終わり、社会復帰初日の朝、玄関の上がりかまちに座りいろ

いろなことを考えた。仕事の仲間に何と声をかけようか、当分は研究室にこもり会わない方がいいのではないかなど、やはり心配は尽きない。

「いってらっしゃい」の声に後押しされ、家を出て職場へ。勇気を出して仲間たちが働く場所へ向かうと、ある人から「おかえりなさい、待っていたよ」と声をかけられた。不安が一瞬で吹き飛ぶとはこういうことだと思ふ。本当にこの言葉に救われた気がする。

考えてみると、この2年で多くの新しい言葉が出現した。3密、ソーシャルディスタンス、ウィズコロナなど。コロナ禍を

生き抜くために生まれたこの言葉たちには、どのような意味があったのだろうか。人を守る指標としてはある程度機能したが、人を救う言葉ではない気がする。では、人を救う言葉とはどこにあるのか。それは古くから身近で使っている言葉の中にあるのだ。そんな言葉を大切にできる環境も、また僕が働ける宝だ。

与えられた環境と、つくる環境。両方を大切にしたい。

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。41歳。